

Title	蒙古の過去と將來 (蒙疆專號)
Author(s)	矢野, 仁一
Citation	東洋史研究 (1939), 4(4-5): 289-301
Issue Date	1939-06-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138810
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

681402

14.11.28

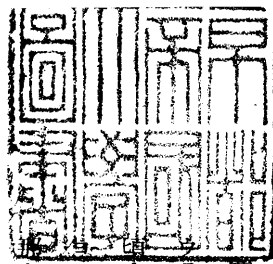
東洋史研究

第四卷 第四・五號
蒙 疆 專 號

昭和十四年六月發行

蒙古の過去と將來

矢 野 仁 一



289

蒙古種族は昔は非常に勇悍な民族であつた。今から七百年程前、拔都の兵はヨーロッパに侵入し、モスクワ、ラヂミール、キエフ等を攻陥し、ロシアを蹂躪し、ポーランドの當時の都クラカウを攻陥し、シレジアより近までチエコスロヴァキア國となつてゐたモラヴィア、ボヘミアを経て、アウストリア、ハンガリアまで攻入り全ヨーロッパを震撼せしめた。一方また今から六百七八十年程前から五百七八十年程前まで百年そこそこの間全支那をその武力下に支配した。さうして百年そこそこの支那から追拂はれ、蒙古の故地に敗退したが、なほ屈服せず明一代を通じ頑強に抵抗を續けた。もはや成吉思汗、忽必烈の時のやうに支那を征服するだけの力はなかつたが、支那の邊疆を寇掠することを止めなかつた。滿洲民族は二百六七十年程支那を支配したがその間に支那の文化に感染して武勇の精神を失ひ、非常に懦弱となり、殆んど民族的意識を失ひ、滿洲の本國ですらも失ふやうになつた。清朝が辛亥革命により退位した時には既に歸るべき本國がないやうな有様であつた。これが滿洲問題の

解決の非常に困難なりし所以である。滿洲國が今日のやうに立派な獨立國となつたことは誠に夢のやうな話である。この點蒙古は非常に違つてゐるのである。蒙古は支那の文化に感染しなかつた。支那から蒙古に敗退した時何一つ支那の文化の御土産を持たずに元の游牧民族として歸つたが、然しその代り民族的意識を失はず、また支那から追拂はれても歸るべき本國を失はなかつたのである。支那を支配してゐる間に支那人の華奢の風俗に倣つて多少游惰の風となつたことは免れなかつたとしてもまださう弱くなつたやうではない。

然るに今から三百六十七十年程前、今の綏遠省のオルドス、即ち包頭・五原など、黄河を隔て、相對してゐる伊克昭盟旗の游牧地に俺答汗アンタガといふ有力な酋長が起つて、屢々支那の邊境を寇掠侵擾して明を悩ましたが、晩年喇嘛教に歸依し、自らその保護者となつてから蒙古において喇嘛教は俄かに盛んとなり、蒙古人は始めて弱くなつた。蒙古が支那を支配した元朝の一代、隨分喇嘛教の僧侶を優待したが、それはチベットなどに對する政略上の必要に出でたもので、朝廷だけの宗教で、蒙古人民一般の信仰とならなかつたためだらうか、蒙古が支那から追拂はれて蒙古の故地に引あげた後、殆んど二百年程の間は、どうも人民が喇嘛教を信じたやうな形跡はない。俺答汗の時から喇嘛教は盛んとなり、清朝になつて一層盛んとなつた。清朝は邊疆の藩屬地方を懷柔招撫する政策上喇嘛教を獎勵優遇したのである。庫倫即ち今のウラン・バートル・ホトにある慶寧寺といふ喇嘛廟、多倫諾爾の彙宗寺ゴフスム、善因寺シャラスム即ち舊廟、新廟や熱河離宮の周圍の山々に連互して創建されてゐる布達拉廟、達什倫布廟ダシレンブ、普寧寺、普佑寺、安遠寺などといふ大きな喇嘛廟を始めとして蒙古到る處に喇嘛廟は創建された。蒙古の草地、沙漠地を旅行して金色燦然たる喇嘛廟を見る時の蒙古人の歡喜法悅の心持は想像に餘りある。活佛は諸處に轉生した。『大清會典』に記載してあるところだけでも、内外蒙古に七十六人からの活佛がある。熱

河・五台山・多倫諾爾等の喇嘛廟を住持してゐる章嘉呼圖克圖^{チャンヂェフツク}、阿嘉呼圖克圖^{アチャフツク}は北京駐在の活佛として、多倫諾爾の新舊廟や熱河五台山の喇嘛廟を兼轄するもので、内外蒙古七十六人の活佛の中に加はらないことになつてゐる。呼圖克圖^{フツク}は活佛の義である。ロシアのイヤギンフ(ヒアシンツ)といふ學者は全蒙古の活佛を百三人と計算してゐる。

喇嘛教が盛んになつてから蒙古は俄かに弱くなつたといふことは定説のやうになつてゐるが、さういふこともあらうが、蒙古の弱くなつたのは、そればかりではあるまい。蒙古に旗即ちホシュンといふものが出来、旗の界が限定さるゝやうになり、その界を越えて游牧することが禁ぜらるゝことになつてから、昔のやうな大活動が出来なくなつたことは、蒙古の弱くなつた一つの大きな原因であらう。旗の觀念は限界の一定した游牧地で、旗の限界は山や川があれば山や川、なければ石塊を積あげて標識とした鄂博^{オボ}である。清朝の初めから旗といふものが出来るやうになつた。さうして旗の界を越えて游牧すれば王公、台吉なれば罰俸一年に處せられ、旗下の人民なればその本人と畜産とを合せて發見者に給與せらるゝことになつた。何せよこれでは大活動が出来ない筈である。蒙古は盟、部、旗などに分れてゐるが、部は同じ血族より出でたる部族を意味し、昔は最も重要な政治團體であつて、政治的活動の中心であつたが、今日は部は政治上の意味は殆んど無い。今日は旗は蒙古の政治組織の單位で重要な意味を有するが、部はその上に立つ政治機關でなく、旗の上に立つ政治機關は盟である。

二

蒙古は明の時までは支那の敵國であつた。清朝が滿洲に起つてから、蒙古は明と清との間に立つことになり、

蒙古が清に屬すれば、清は明を攻むるに都合がよく、明に屬すれば、明は都合がよいといふ關係があり、蒙古は兩方から同盟を強ひらるゝ有様であつた。察哈爾部の林丹汗は元の嫡裔たる韃靼の小王子の後で、可汗と稱し、蒙古統轄の權利を主張してゐたが、明の歳幣を食つて明と同盟した。然るに成吉思汗の同母弟で大蟒フベの如しといはれ、成吉思汗の命を受けて金の遼西諸郡を攻略しその方面において封地を與へられた拙赤合撒兒チチハカサル（蒙古游牧記フツツサルハ布圖哈薩爾）の子孫だといふ科爾沁部などは、明の永樂帝の時から早く察哈爾部と別れてをり、その關係は既に疎遠である上に、その領土は滿洲と犬牙錯綜し、絶えず滿洲戰爭にも關係し、また滿洲諸部と婚姻を通じ、殆んど滿洲と區別を知らなかつたほどに親密であつたので、察哈爾部と反對に清に屬した。科爾沁部以外の蒙古諸部はなほ察哈爾汗の位を承認してゐたが、林丹汗はその服屬を要求すること餘りに急であつたので、漸く察哈爾部から離るゝことになり、清と察哈爾部との間に叛服常ならざる有様であつた。かくて清と察哈爾部とは兩立し難き關係となり、清の太宗は三度親征し、三度目にその幕庭を襲つて林丹汗を走らし、林丹汗は人畜十餘萬を率ゐて遁走し、歸化城を経て黃河を渡り、青海を距る十日程の大草灘地で病死したといふことであるが、その後有名な睿親王多爾袞（太宗の異母弟）はまた林丹汗の子額爾克孔果勒額哲の駐牧してゐた黃河を距る八日程の托里圖地方に遠征し、額哲及びその部衆を收服した。名義だけでも蒙古諸部が可汗として奉戴した察哈爾部が清に服從したのだから、内蒙古の諸部、察哈爾、科爾沁、札賚特、杜爾伯特、郭爾羅斯、敖漢、奈曼、巴林、土默特、札嚕特、四子部落、阿嚕科爾沁、翁牛特、喀喇車哩克、喀喇沁、烏喇特等十六部の四十九貝勒は王公大會議を開き、滿洲皇帝は蒙古可汗の大統を受繼いだものとして、ボグド・セツェン汗といふ尊號を勸進しこれに臣服することとなり、林丹汗の兵亂を避け、外蒙古に遁竄してゐてこの決議に加はらなかつた内蒙古の諸部、即ち昭烏達

盟の克什克騰部や、錫林郭勒盟の烏珠穆沁、阿巴噶、阿巴哈納爾、蘇尼特、浩齊特諸部も、數年ならず相繼いでこの決議を承認し、清朝に服屬することゝなつた。

察哈爾部は清朝に降服したる後、清朝はその蒙古における特別の地位を考慮し、額爾克孔果爾額哲に太宗の第二皇女を降嫁せしめ、固倫額駙（皇婿）となし、和碩親王に封じ、位内蒙古四十九旗貝勒の上に冠せしめ、二十四部の上に特別の地位を與へ、遼東邊外の錦州府、義州に安置せしめたが、康熙帝の時、吳三桂の亂に當り、額哲の子で、太宗の皇女の所出であつた布爾尼、阿布鼐兄弟は奈曼等の諸部を煽誘して、林丹汗の前敗に報いんとして叛亂を企てたため、叛亂が鎮定され、布爾尼兄弟が敗北した後、清朝は察哈爾部の自治權を奪ひ、その故地に牧廠を設け、內務府、太僕寺に隸せしめ、察哈爾部の部民を宣化、大同邊外に徙牧せしめ、鑲黃、正黃、正紅、鑲紅、正白、鑲白、正藍、鑲藍八旗に編し、東西二翼に分ち、その旗内の官地及び支那人民との互市訟獄に關する事務は四旗廳及び獨石口、張家口、豐鎮、寧遠各廳をして治理せしめ、その旗務は總管をして管理せしめ、都統を設けて統轄せしめ、凡て理藩院典屬司に隸せしむることゝして内蒙古と區別した。この八旗は内蒙古四十九旗の外にありて、官は世襲することを得ず、事は自專するを得ず、蒙古各旗の札薩克が旗の君長として旗民を子とするものと全く異つてゐた。

外蒙古が清朝に臣服することになつたのは内蒙古より五十年程後れてゐる。今から二百五十年程前、今の新疆省伊犁、塔爾巴哈台地方はオロト蒙古とかカルマックとか西蒙古とかいはれ、青海や寧夏省の漠西蒙古と同じく内外蒙古とは別部をなしてゐる蒙古種族の游牧地であつたが、その一部のズンガル部の首長ガルダンが、喀爾喀即ち外蒙古の左右翼をなしてゐた土謝圖汗と札薩克圖汗との不和に乗じて外蒙古に侵入した時、外蒙古の部衆

は既に弱く、抵抗が出来ず、清朝は佛教を崇敬してゐるから、これに依るは蒙古萬年の福であるとして、部族を擧げて、氈包即ち天幕も器物も馬、駱駝、牛、羊なども携帯する餘裕なく、路を分ち沙漠を踰えて内蒙古の界内に遁入り、康熙帝の保護を請ふに至つたのであるが、康熙帝は内蒙古の界内において牧地を與へ八年間これを恩養し、一方において親しく外蒙古まで遠征しガルダンを破り、ズンガル兵を驅逐し、外蒙古諸部をその故地の漠北の舊牧地に歸牧せしめたのである。

内蒙古の西、今の寧夏省の定遠營地方のアラシヤン・オロート（阿拉善額魯特）や、居延海、オチナ河地方のオチナ・トルゴート（額濟納土爾扈特）はオロート蒙古に屬し、ズンガル部のために抑壓侵逼され、やはり康熙帝の保護により、今の地に牧地を賜はつたものである。

三

さういふわけで、蒙古は清朝に服屬したのであるが、それは清朝即ち滿洲皇帝に服屬したのであつて、支那に服屬したのではない。清朝即ち滿洲皇帝は一方において支那の皇帝として支那を支配すると共に、一方において蒙古の額眞可汗（エジェン汗）として蒙古を支配したのである。それ故蒙古と支那とは直接の關係がなく、清朝即ち滿洲皇帝を通じての關係に過ぎないから、同君聯合の關係に過ぎないわけである。清朝はまた蒙古をその支那の領土と同視せず、別國のごとく取扱つてゐた。さうして蒙古と支那とを隔離し、常に蒙古人民を滿洲朝廷の味方として支那人民に對抗せしむるといふ政策を取つてゐた。然し清の時代に蒙古と支那との關係は歴史有つて以來未だ曾て無い平和の關係となつたので、蒙古は清朝の領土であつて、支那の領土ではなかつたのだが、支那人

民は支那の領土となつたやうな心持で、續々蒙古に出かけ蒙古の牧地を開墾したのである。清朝は蒙古の保護者として、蒙古人民の生計を保護する見地から、蒙古の生計と恃んでゐる牧畜に害があるといふので、支那農民の蒙古移住、蒙地開墾を禁ずる法令を繰返し繰返し發してゐる。繰返し繰返し發してゐるのは、それが行はれなかつた證據であるが、それにも拘らず根氣よく繰返ししてゐるのである。また支那商民の蒙古行商についても種々の制限を設けた。支那商民は院票といふ理藩院の許可證を張家口、多倫諾爾、綏遠城などにある役所から交付を受けなければならず、それには姓名、貨物、往先地、出發期などを明記しなければならず、往先地で役人または旗の長即ち札薩克^{ジャサク}の檢査を受けなければならなかつた。まるで外國に旅行するものが、旅行券をもらはなければ旅行が出来ないと同様な有様であつた。貿易は必ず現金現物の交換でなければならなかつた。滞在期限は一年で、その後貸金があるとして逗留することは出来なかつた。さういふやうに種々の制限を設けたのである。帳房を張ることは宜しいが、家を造ることは禁ぜられてゐた。唐努烏梁海地方には絶対に往くことが禁ぜられてゐた。わづかに烏梁海の方から貂の皮を納むるために烏里雅蘇台に來るものと交易することを許さるゝに過ぎなかつた。支那人民の蒙古に往くことは殆んど外國に往くと同様の制限を受けてゐたのである。

四

然し、清朝は光緒時代以後ロシアの南下勢力の壓迫を感じ、遂に主義を一變して殖民實邊の政策を取るに至つた。最近數十年來蒙古は益々貧弱となり、強隣に對する防禦は頗る薄弱となつたといつて、支那人民を成るべく多く蒙古に移住せしめ、支那人の移住せる地方には支那内地の行政に倣つて、府・州・廳・縣制を施行した。さ

うして遂に宣統時代に支那農民の蒙地開墾に關する禁令を正式に撤廢し、また支那と蒙古とを隔離するための種々の制限を撤回した。

この結果外蒙古はロシアの保護援助により獨立を宣言するに至つた。これは清朝が辛亥革命により退位するに至つた前年のことである。從來支那人民に對して常に蒙古人民の味方であつた清朝が今や支那人民の味方となり、蒙古人民の生計を壓迫するに至つたのは不都合である、これでは安心して清朝に依頼してゐることが出来なといふので獨立したのである。固より自ら獨立するだけの力があつて獨立したわけではない。ロシアの外援がなかつたならば獨立が出来なかつたのである。それ故獨立したとはいつても、今日ロシアのいひなり次第になつてゐなければならぬ有様である。

五

外蒙古の獨立した時、内蒙古が外蒙古と事を共にして獨立することが出来なかつたのは、獨立することを欲しなかつたためではない。種々の理由もあつたが、外蒙古のロシアにおけるごとく、當時外國の強援が望まれなかつたためである。獨立した場合、外蒙古と違つて支那に接近してゐるため、直ちに討伐せらるゝ恐れがあつたためである。昔の弓矢戰、一騎打の戰爭の時代とは違ひ、積弱の蒙古は支那の敵ではなかつたのである。然るに滿洲事變より滿洲國の建國となり、内蒙古人民は非常な刺戟を受けることになつた。彼等は年々増加する支那移住農民によつて益々壓迫され、その生活と恃む牧地は益々狹隘となり、生活は益々苦しくなるのみならず、既に内蒙古においては、滿洲國內に歸併された興安省熱河省などの地方は別としても、綏遠省とか、察哈爾省とか、支

那同様の省制が施行され、蒙古人は支那本位の支配下に甘んじなければならなくなつた、若しこのまゝに推移したならば滅亡する外はない、滿洲國における蒙古人、外蒙古における蒙古人と比較して我々の運命はどうなるであらうかと考へ始めるやうになつた。それが今度の支那事變を契機として我が國及び滿洲國の強援が望まれることになり、遂に國民黨政府に對して獨立することになつたのである。

六

蒙古民族と滿洲民族とは、元來種族も異なり、生活狀態も、一は游牧、一は定住射獵といふやうに違つてをり、また支那文化に對する感受性も異なつてゐたわけであるが、清朝二百數十年の間においてその關係は非常に親密となつた。殊に滿洲と近接してゐた科爾沁部は内蒙古諸部中にも、率先して察哈爾部を離れて服屬した關係があるのみならず、太宗の朝鮮征伐、喀爾喀外蒙古征伐、索倫征伐、明征伐、黑龍江征伐に従ひ、また杜爾伯特部、郭爾羅斯部と共に睿親王に従つて山海關に入り、流賊を走らして北京を定め、豫親王(睿親王の弟)に隨つて江南を定め蘇尼特の胥騰機思の討伐に従ひ、喀爾喀外蒙古兩汗の援兵を破り、また康熙帝の時には察哈爾の布爾尼の叛を討平した。かくのごとく蒙古は清朝の大征伐には必ず從征して大勳功を立てたのであるが、また内外蒙古諸部には、清の太祖の時から乾隆の初までに、公主(皇女)を娶つて額駙と稱したものゝが八人あり、清朝の皇后となつたものも數人ある。太宗の皇后孝端文皇后、孝莊文皇后、順治帝の皇后孝惠章皇后のごとき皆科爾沁部の出である。『清史稿』公主表によると、明白に科爾沁部に降嫁したとわかつてゐる公主(皇女)だけでも十四人からある。かくのごとく懿親の關係あるが故に、清朝でも科爾沁部は最もこれを優待し、圖什業圖親王、達爾漢親王、

卓哩克圖親王、札薩克圖親王の四爵、五人の札薩克を世襲せしめた。その俸幣も二十四部に冠してゐた。

その外、敖漢にも、巴林にも、翁牛特にも、喀喇沁にも、奈曼にも、土默特にも、札嚕特にも、阿嚕科爾沁にも、また外蒙古の土謝圖汗部にも、三音諾顏部にも降嫁した公主は少なくない。その子孫は今内外蒙古において繁衍してゐる。『蒙古游牧記』は今から八九十年程前の著作であるが、科爾沁部達爾漢親王族の一族だけで、公主の子孫たる台吉は二千人あり、圖什業圖親王族の一族だけで五百二十餘人あり、敖漢に六百人、巴林に百七十餘人あると述べてある。それから八九十年後の今日、内外蒙古における清朝皇女の子孫は幾何になつてゐるか。随分澤山あることだらう。滿洲蒙古の懿親關係は清朝の皇后や公主ばかりの關係でないことは、現に肅親王家などが、喀喇沁部、科爾沁部、外蒙古の土謝圖汗部（右翼左旗？車親王）、三音諾顏部（那親王）、オロト蒙古の阿拉^{アラ}善親王^{シヤレ}など、姻戚關係で親密に繋がつてゐることでも察せられる。今日蒙古聯盟自治政府に加盟してゐる錫林郭勒盟やまた今日まだ加盟してゐないが、今後加盟することが期待さるゝ烏蘭察布盟や、伊克昭盟の諸部族は直接に清朝との懿親關係はないやうであるが、そのある他の蒙古諸部族との姻戚關係によつて間接に滿洲と關係があることはいふまでもない。

ともかく今日蒙古人は滿洲國皇帝をなほ額^エ眞^{ジン}汗と稱し、蒙古民族の可汗であるごとく考へて尊敬してゐるやうである。今日蒙古には滿洲國の康德皇帝のごとく全蒙古民族の尊敬信望を一身に集めてゐるものはない。

外蒙古がズンガル部ガルダンに侵略され一旦その領土を失つたにかゝはらず、康熙帝の保護恩養によりこれを恢復することを得たのである。この國家再造の恩義を思へば清朝に對して獨立などの出来る義理合ひではない。

内蒙古は清朝が未だ明を取らない前から既に清朝に服従し、林丹汗のために失ひ或は失はんとした領土を封地と

して與へられ、清朝の兵と共に明征伐に従事したのだから、支那人とは少しも關係がない。清朝の君主が支那に君臨してゐる間は、清朝の君主を通じて支那と一緒になつてゐるといふことも多少の意味がないこともないが、蒙古の可汗たる清朝の君主が退位すれば、即ちその瞬間に支那と蒙古との關係は斷絶するわけで、中華民國がいかなる形式で出来たにせよ、清朝の君主に代つて蒙古をその領土として維持せんとするのは奢望僭越といはなければならぬ。蒙古の方からいつても、清朝の君主が退位した後、その退位を餘儀なくせしめた中華民國に服従するといふことは、餘りに大義名分の辨へがないものといはなければならぬ。

七

今度の事變により蒙古聯盟自治政府が成立し、察南、晉北兩自治政府と共に蒙疆聯合委員會が組織せられ、四月廿九日蒙古聯盟主席德王は蒙疆聯合委員會總務委員長に推薦せらるゝことになつたのであるが、德王は就任と共になした聲明において、聯合委員會成立以來の産業、交通、金融等の諸部門における非常な躍進、昨年八月總務、産業、財政、交通、民生、保安の六部制に擴大せられた政治機構の改革によつて、日本帝國の犠牲的支援と相俟つて醜類を艾除し、秕政を廓清し、生聚日に殷賑にして、民衆はその居に安んじ、その業を樂むに至りしことを顯揚し、廣く世界の情勢を通觀し、本地域の實情を詳察するに、吾人の負ふべき責務は極めて重大にして、須臾も安閑晏居を許さず、七百萬民衆と共に思ひをこゝに致し、日滿兩帝國並に新興諸政權と親保隣愛の實を擧げ、外益と防共の鐵壁を強固にし、内よく民族協和して一致團結益々政權の基礎を強化せんことを冀ふと述べた。今日蒙古種族は内外蒙古の外、新疆省にも青海省にも游牧してゐるが、それはともかくとして内外蒙古は蒙古

種族の根本地即ち本土といつてよい。然るにそれがソヴィエツトロシア勢力下の外蒙古、滿洲國內に編入されてゐる興安四省及び熱河省の内蒙古、徳王治下の綏遠省の蒙古聯盟自治政府下の内蒙古と三つに分れてゐる。それに未だ蒙古聯盟自治政府に屬せずして、なほ國民政府の治下に殘存してゐる綏遠省西南西北一帯の内蒙古や、寧夏省のオロト蒙古などを加ふれば實に四つに分れてゐるといつてよい。これは恐らく蒙古民族の要望に背くもので頗る不自然な状態であるから、いつかは匡正されて統一さるべきものであらう。それには蒙古聯盟が母胎とならなければならぬことは明かである。今蒙古聯盟は察南、晉北兩自治政府と共に蒙疆聯合をなし、徳王は新たに總務委員長に就職したことは正にこの耀かしき將來を暗示するものゝごとく思はれる。然るに今の蒙古聯盟はこの耀かしき蒙古統一の母胎として、徳王が生聚日に殷賑と述べてゐるにかゝはらず、餘りに貧弱であり、またその人民は、餘りに無智である。察南、晉北等の蒙疆地方は昔から支那と蒙古との間にあつて屢々蒙古民族の支配を受け、その人民も純粹の支那民族といひ難く、蒙古に對する感情は、おのづから南方支那の比較的純粹なる支那人民のそれとは大いに異なるものがある。ラティモアの所謂民族的貯水池 (cestrvo) で、極めて特異な地方である。これは今後蒙古聯盟より引離して新たに成立すべき支那の統一政權に歸屬せしむべきものであらうか。それとも蒙古聯盟をして蒙古統一の母胎としてその大業を成さしむるための基礎的役割を果さしむべきものであらうか。蒙古及び蒙古人民の今日の貧弱、無智は、敵地の掠奪が出來なくなつたことゝ、旗界の定まつたことゝ、喇嘛教に惑溺したことなどによるものであらうが、貧弱を變じて富強となし、無智を化して有智となすために、敵地の掠奪を許すやうなことは今日において固より出來べきことでもなく、また旗界を撤廢し、喇嘛教を禁絶するといふやうなことも容易に出來べきことでない。またたとひ出來たところでそれは望まらるべくもない。

それよりはこれを利用し、旗地について牧草を改良するとか貯蓄するとか、畜産を増殖改良し、人畜の病疫を驅除するとか、また土壤の改良すべきはこれを改良し、水利の利用すべきはこれを利用して、定住の俗を起すと共に、喇嘛及び喇嘛廟について教育を寓し教化の源泉となすことなどを考慮すべきであらう。元代蒙古人の武勇を以てして、なほ百年そこそで支那から敗退しなければならなかつた。蒙古聯盟は今日その管内にあつて、武勇においても、人口數においても、知識教養においても蒙古人に優るとも劣らざる支那人をして、蒙古の統治に悅服せしむることが出来なければ、また外蒙古の蒙古人、國民政府治下の蒙古人をして嚮心仰慕せしめ、相率ゐてその治下に走らんことを心願せしむるやうにすることが出来なければ、蒙古統一の母胎たることは思ひもよらないことのやうに思はれる。徳王が本地域の實情を詳察するに吾人の負ふべき責務は極めて重大にして須臾も安閑晏居を許さずと述べたのは、恐らく深く心に期するところがあるからであらう。